

知求会ニュース

2006年12月

第20号

修了おめでとうございます！

国際社会研究専攻第4期生の篠崎博行さん、国際社会研究専攻第6期生の干哲さん、国際交流研究専攻第1期生の佐々木貴子さんが9月27日(木)午前10時に学長室にて学位を授与されました。なお、篠崎さんは当日欠席されました。

博士後期課程入学試験

来年3月3日(土)に、新設の国際学研究科博士後期課程の入学試験が行われます。出願受付期間は1月29日(月)から2月5日(月)まで、問い合わせ先は宇都宮大学入試課入学試験第二係(028-649-5405)です。募集要項は12月下旬配布予定です。

宇都宮大学大学院国際学研究科公開授業の案内

国際学研究科では、ひろく一般社会人を対象に、「グローバル化と英語圏文化」をサテライト公開授業として、以下の内容で宇都宮市中央生涯学習センター(宇都宮市中央1丁目1番13号)にて開催されました。

公開授業科目 国際学総合研究A「英語圏文化論」

11月11日(土) 午後1時30分から4時30分 柏瀬省五教授

「現代世界における英語」

11月18日(土) 午後1時30分から4時30分 市川裕見子教授

「シェイクスピアは世界をめぐる」

11月25日(土) 午後1時30分から4時30分 米山正文助教授

「カナダとアメリカ 歴史と文学」

12月02日(土) 午後1時30分から4時30分 佐々木一隆教授

「アメリカ文化・グローバル化」

12月09日(土) 午後1時30分から4時30分 アンドリュー・ライマン講師

「多文化主義：グローバル化のモデル」

12月16日(土) 午後1時30分から4時30分 高際澄雄教授

「英国放送教会(BBC)とイギリス政府 2つのグローバル化」

9月入試合格結果

国際社会研究専攻 一般 4名・社会人 0名 計4名

国際文化研究専攻 一般 3名・社会人 1名・外国人2名 計6名

国際交流研究専攻 一般 1名・社会人 0名・外国人 1名・

国際交流・国際貢献活動経験者 3名 計 5名 合計 15名

国際学部縦の会実行委員会主催交流会開催

8月3日(木)午後6時半から9時半まで、宇都宮・フェアシティーホテル11階にて交流会が開催され、大学院生は15名参加しました。詳細ならびに写真は国際学部同窓会HPをご覧ください。http://www.afis.jp/mt-static/archives/2006/09/friend_in_ship.html

交流会に参加して

国際学研究科国際社会専攻 津金麻希子

「国際学部って縦のつながりが少ないよね。」学生のそんな一言から開催されたのが国際学部交流会(パーティー)でした。学生が実行委員会を結成し、計画・資金調達・会場設置など多くの日数を費やして8月3日に、学生から先生、卒業生、国際学部以外の学生まで約120人が集まって始まりました。会場には大きなスクリーンに映し出された映像と音楽がながれ、番号ごとに分かれたテーブルではクイズを通して1年生から先生までが互いに協力するような内容と工夫され、「縦のつながり」を作る場となっていきました。クイズの内容は国際学部ならではのトリビアで、若かりし頃の先生たちの写真が映し出されたときには会場が盛り上がりました。フリータイムの時間もあり、グループ内だけではなく、参加者全員で学年を超えた交流を持って、新しい関係を築けていったのではないかと思います。

なかでも印象的だったのは、学生、卒業生のなかから学内外問わず独自に活躍している団体の活動発表でした。授業でタイ語を勉強しながらタイの子どもたちに絵本を翻訳して贈る活動、フェアトレード活動をするNGO団体を立ち上げた学生、宇都宮の市民活動や地域団体をサポートしながら学生と地域をつなぐ仕事に就いた卒業生などなど。多くの学生が自分たちでも何か出来ないか、その想いを形にして世界を通して活動している様子が伝わってきました。こうした活動をしている学生がいることを知らないまま卒業してしまう学生、先生たちのほうが多いのではと思い、まして院生となるとごく一部の学部生としか接しないまま修了という状態なので、この国際学部で同じ学生がどんなことをしているのか知る貴重な機会になりました。「うちの学生、頑張っているなあ」と嬉しそうに感想を話す先生の顔も印象に残っています。

最後には参加者全員で集合写真を撮り閉会となりました。実行委員会には「こんなに集まってくれて嬉しい、良かった」と涙ぐむ学生もあり、多くの時間と苦勞を感じました。また「この会は今回だけで終わらせたくない。これから続けて行って欲しいし、いずれは国際学部という学部の枠も超えて、宇都宮大学全体の交流会にしていきたい」と語る実行委員長の言葉からも会の成功を感じ、この機会に創られた縦のつながりが、今後の国際学部、宇都宮大学の大きな力になるのではないかと思います。

世界遺産講演会開催

11月18日(土)、宇都宮大学 大学会館にて TBS「世界遺産」プロデューサーの辻村国弘氏を講師に、ハイビジョン映像を通して世界遺産が幅広く紹介されました。第一回講演は午前10時から午後0時半まで小中学生を対象に、第二回講演は午後2時から4時半まで高校生以上を対象に開催されました。

日光の社寺を中心としたコレクション展開催

宇都宮大学附属図書館は11月13日から12月10日まで、「世界遺産・日光の社寺を中心とした所蔵コレクション展示会」を開催した。「日光山満願寺金堂故事双紙」や「日光山縁起」など日光に関する和綴本・稀覯(きこう)書コレクションを百十三点展示した。また東照宮関係の図書も七十冊並べられた。

掲載記事紹介

1. 下野新聞 平成18年10月9日(月)に、私の下野新聞批評「世界とのつながり 伝えて」、同紙平成18年10月30日(月)に、私の下野新聞批評「信頼関係形成が重要な鍵」、また同紙平成18年11月20日(月)に、私の下野新聞批評「外国記者招き幅広く交流を」と題した**阪本 公美子**先生の記事が掲載されました。

2. UU now 第7号 平成18年11月20日(月)の8面「研究 keyword」に、「子どもたちの教育の国際化?」と題した**田巻松雄**先生の記事が掲載されました。

3. 下野新聞 平成18年11月25日(土)に、全県コーナーで「外国人教育環境 テーマにシンポ」と題した**田巻松雄**先生の記事が掲載されました。

4. UU now 第7号 平成18年11月20日(月)の4面「ベストティーチャーに聞く」に留学センターの**若山俊介**先生のインタビュー記事が掲載されました。

5. 宇都宮大学留学生センター・ニュース第9号に、国際文化研究専攻第4期生の**田中瑠美**さんの「パラツキー大学からの便り」の記事が掲載されました。

6. 宇都宮大学留学生センター・ニュース第9号に、国際交流研究専攻第3期生の**ジェン アバドハイメ フェルナンド**さんの「留学生見学旅行～山梨県の旅行」の記事が掲載されました。

宇都宮大学各学部等同窓会連絡協議会報告

平成18年度第三回の会合が、12月2日(土)午後1時半から宇都宮大学第2会議室で開催されました。出席者は水本忠武 理事・海野 孝 理事・友松篤信 学長特別補佐の大学側3名と事務局担当者5名、岡本英子 国際学部同窓会副会長・土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・小林春雄 教育学部同窓会会長・柴田 毅 同副会長・阿久津嘉子 事務局局長・落合信夫 工学部同窓会会長・安達久博 同副会長・和賀井睦夫 農学部同窓会会長・松澤康男 同理事長の同窓会側9名でした。議事内容は、検討事項として、1. 宇都宮大学博物館のグ

ランドデザインについて 2. 学位記授与式・入学式での各学部等同窓会連絡協議会来賓挨拶順について 3. その他 や各同窓会からの活動報告・要望等、そして大学の現状報告等がなされました。

国際学部だより

1. 国際キャリア合宿セミナー2006・一般公開シンポジウム開催

9月24日(日)、宇都宮市駒生にある栃木県青年会館にて開催されました。また、セミナーの様子は、9月25日(月)に、NHKのニュース「一都六県」で放映されました。

下野新聞 平成18年10月8日(日)の記事の中で、一般公開シンポジウムは「国際人への道」語る」と題したQ&Aの詳細記事が紹介されました。

国際キャリア合宿セミナーには、宇都宮大学のほか、白鷗大学、東京大学、新潟大学、上智大学、早稲田大学、首都東京大学、山口大学などの大学、企業等から80名の参加がありました。特に、宇都宮大学と白鷗大学の学生には、単位認定を行って、好評を得たようです。学生たちの中には、講義や演習終了後も講師たちと夜を徹して語り合う姿も見られました。また、閉講式の中で開催者側から、国際キャリア合宿セミナー2007を全国規模に発展させていきたい抱負が語られ閉会しました。 文部科学省[文教ニュース]から一部抜粋

2. 掲載記事紹介

下野新聞 平成18年9月13日(水)に、「談話室」の中で国際学部2年の川原田 光さんの記事が掲載されました。

読売新聞 平成18年9月20日(水)に、「街・ふれあい」コーナーで「ミスはこだてがPR」と題した伊勢谷 樹里さんの記事が掲載されました。

下野新聞 平成18年10月19日(木)に、「協力隊で力試す」と題した国際学部4年の萩原 踊介さんの記事が掲載されました。

UU now 第7号 平成18年11月20日(月)の1面に、国際学部国際文化学科卒業の梅田 啓介さんらが結成しているロックバンド「キャプテンストライダム」の記事が掲載されました。

研究室訪問 11 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第11回目には地域社会形成研究講座所属のマリー・ケオマノータム先生にお願いしました。

「研究」をめぐる自分史的概観 そんな年でもないけれど

マリー・ケオマノートム

1. 日本語から言語社会学へ

私はバンコクで生まれた。子どもの頃から日本のテレビを見て育ち、やがて日本という国に憧れを抱くようになった。日本を知りたい、日本に行きたいという思いから、大学での専攻は迷いもなく「日本語」を選んだ。当時のタイでは日本語はまだマイナーな存在で、専門課程をもっている大学は1つしかなかった。在学中に念願の日本留学を果たし、さらに深く日本語を究めたいと考えるようになった。同時に、言葉は生き物であり、それを深く理解するためには、その国の文化や社会への理解を欠くことはできないということを実感した。

留学体験を経て、私の関心は徐々に言葉と社会の関係へと移行し、再び留学した大学院では、言語社会学の立場から日本語の敬語表現とその背景にある人間の社会関係との関連を研究することになった。これが社会学との出会いであり、その後、私の関心はさらに「社会」へと傾斜していくことになった。

2. 外国人労働者問題への関心

私が初めて日本に来たのは1982年のことだが、当時の日本は「国際化」が叫ばれるようになって間もないころだった。しかし、その中身はといえば、いまだ「英語」を代表とする欧米中心のものであったように思う。実際はこの頃にはすでにアジアの女性が「興行」ビザで入国し、飲食業で働く事態が進行していた。彼女たちの多くは暴力団の介入のもとで人身売買の対象となり、パスポートを取り上げられ、売春を強要されるなど、人権侵害にさらされていた。これが「じゃばゆきさん」問題であり、ここには日本とアジアの関係、日本とアジア諸国それぞれの国内の社会構造の矛盾が集約されていると感じるようになった。ちなみに「じゃばゆきさん」は「からゆきさん」に由来する言葉である。「からゆきさん」は、戦前の日本の貧困家庭から東アジア、南方へと売られた女性たちのことであり、その中には奴隷や娼婦のような扱いを受けた者もいた（ここでの「から」=唐は朝鮮半島や中国のみを指すのではなく外国一般の総称である）。

1980年代半ば以降になると、日本はバブル景気に浮かれ、日本とアジアとの経済格差は広がる一方となる。日本の若者は「きつい、汚い、危険」の3K労働を忌避するようになり、そこに東南アジア、中近東から男性の出稼ぎ労働者が大量に流入することになった。外国人が単純労働に従事することを禁じた日本の法律の下で、彼らは観光ビザや学生ビザ、研修ビザで来日し、「不法就労」の形で建設業や製造業の現場労働に携わった。1990年には入管法が改正され、日系人の国内就労が認められることになり、ブラジルやペルーなどから多くの日系人が流入することになった。日系人を例外とする根拠は、日本人との「血」のつながりということのようだが、日系人は言葉をはじめとして文化的にはほぼ完全な「外国人」である。こうして日本社会には、オールドカマーと呼ばれる在日韓国・朝鮮人に加

え、ニューカマーである「合法的」日系人と「不法」就労のアジア系外国人が住むようになり、ニューカマーもまた「定住化」の傾向を強めているのである。

はたして日本は外国人にとって住みよい社会なのであろうか。残念ながら答えは「NO」である。私は、ニューカマーと呼ばれるこうした外国人労働者の問題を企業や地域での実態調査をとおして明らかにし、日本社会における「共生」の実現について何らかの手がかりを得たいと考えるようになった。それは私自身の問題でもあった。

けれども、ふと立ち止まって考える。ひるがえって私の母国であるタイはどうなのか。私はタイのことをどれほど知っているのだろうか。自分の依って立つところをあらためて確認すること。こうしていま私はもっぱらタイの現実に向き合っている。

3. バンコクの地域社会と住民組織

1980年代半ば以降、タイは日系企業の進出などにより急激に工業化が進み、バンコクと農村の地域格差が拡大した。農村では貧困と人口流出、バンコクでは人口集中による深刻な都市問題が発生している。仕事を求めてバンコクに流入した人々は居住に適さない土地にスラムを形成することになる。社会的弱者が自分たちの生活を守り、ともに環境を改善していくためには、なんらかの組織が必要である。こうして結成されたのが、カナカマカーン・チュムチョンと呼ばれる地域住民組織である。ちなみにカマカーンは委員、カナは集団・会、チュムチョンは地域を意味するタイ語である。

従来タイ社会については、タイ人の個人主義的傾向の強さが指摘され、その人間関係の基本は、パトロン-クライアント関係に代表されるパーソナル・ネットワークにあると理解されてきた。このため、タイ社会においては、地域社会を単位とする住民組織は看過され、とくに都市においては、その存在すら疑問視されてきた。しかし、バンコクをはじめとするタイの都市では、スラムを中心に、1970年代から、カナカマカーン・チュムチョンが存在していた。そして、とくにバンコクにおいては、急激な都市化の進行とこれにともなう都市・地域問題の激化のもとで、パッターナー・チュムチョン（地域社会開発）政策が展開され、その受け皿として、1980年代半ば以降、スラム以外の地域にも、カナカマカーン・チュムチョンの組織化が進められてきたのである。

バンコクのチュムチョンには、過密無秩序チュムチョン（スラム）、郊外チュムチョン、新興住宅チュムチョン、公団住宅チュムチョン、市街地チュムチョンという5つの類型がある。これらの居住人口は、すでにバンコクの総人口の3割ほどになっており、さらに増加する傾向にある。カナカマカーン・チュムチョンは、行政によって制度的に認知された「地域区画性」と、住民と行政を媒介する組織として住民と行政の両者から正当性を付与された「地域代表性」をもち、地域社会開発のための行政的必要から組織化された「行政末端組織」であると同時に、経済、社会、物的、保健衛生、精神という各面にわたる包括的機能を担う「地域共同管理組織」であるということができる。

タイの地域社会には、貧困、格差、不平等に起因する多くの物的・社会的問題が山積し

ている。それら乗り越えるエンパワーメントの可能性は、住民の組織化とその主体的な行動のうちにこそあると私は考えている。

さいごに一言。バンコクの地域社会はたえず変化している。問題を正しく捉えるためには、まず自分の目と耳で現場を確かめることが必要である。私は自分の研究とは相対的に独立した教育活動として、毎年学生諸君とともにタイでの現地調査を実施しているが、いろいろしんどいことはあっても、これはこれからも続けていくしかないと思っている。

知究人 06 第 9 号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。第 20 号の第 6 回は、寄稿者を探しているところですのでお休みします。

フォーラム 第 4 号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。2006 年の師走を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。) 今回は、友松研究室 OB・高橋 昭博さんと国際交流研究専攻第 1 期生小池研究室 OG・趙 春花さんをお願いしました。

「宇都宮大学とは？」

高橋 昭博

JA うつのみや園芸指導係
栃木県青年海外協力隊事務局長
平成 17 年 3 月卒業

1. 入学の動機

私が宇都宮大学の大学院を受けるきっかけは、青年海外協力隊から帰国して自分の学力の無さを痛感したのと、教育の必要性から大学院を受けようと、宇都宮大学の教務課を訪れたことから始まった。当初は教育学修士を受けようと思ったのだが、どうも国際学修士があることが判明。そこで願書を出したのが、国際学研究科だったのである。

これがたまたま上手く受かり、入学の運びとなる。当時 JA うつのみやに二回目の入社(JA では初)という異例の職員が更に大学院に働きながら行くという更に破天荒な行動に人事は戸惑ったが、当時の課長が前向きな人で勉学の機会を与えてもらったことはとても大きい。(許可が出なければ JA は辞めようと思っていた)

2. 入学後

入学してからが大変であり、仕事を終わらずしても夕方 5 時には終えて登校した。たまに遅れること、出席できないことしばしば。おかげで単位は落とすし、教授とも言い争いをした懐かしい思い出もあるが、とにかく不眠不休で勉強も仕事も両立できるよう努力し

たが、大学院 2 年生の時、趣味でやっている剣道の指導中にアキレス腱を断裂、入院を余儀なくされたことを機に修了を 3 年計画にした。

宇都宮大学の懐の広いところは、3 年居ても授業料は 2 年分でいい事は最高に良かった。

また、この大学院の入学を機に、教育の半田さん、農学の粕谷さん、福村先生という協力隊経験者と出会えたことは物凄く良い出会いとなった。

3. 研究課題

研究課題は物凄く悩んだが、当初から協力隊で働いた任地タイの農村開発と農協の存在意義を 5 年分のデータ元から検証した。特にデータを取りに仕事の合間を 2 泊 3 日などのスケジュールでデータを取りに行くこともあり、相当きつかった記憶もある。

最終的に書き上げるとなると、膨大なページになってしまい、会社も 2 週間休んで書き上げた苦い経験もあるが、この論文を書き上げることによって、大学教授の苦勞が良く分かった。

4. 大学改革

宇都宮大学に居て、特に思ったのが、物凄く保守的な大学だと気づき、協力隊枠を作ってもらえるように友松教授にお願いした経緯もある。今回博士後期課程もできた事もひとつあるが、在学中に修士課程で新しい専攻 (国際交流研究専攻) ができたことは、非常に喜ばしいことのひとつである。これを機に国際学部の新しい風が吹く事を願っているが、まだまだ改革すべきことは沢山あると認識している。

特に、国際学部、国際学研究科の特色が未だミクロ的で、マクロ的な方向性ではない気がしてならない。行政も教授も国際化に対して更なる方向付けを宇都宮大学から発信する意気込みが必要であると思うし、協力隊をもっと活用してもらいたい。

私が持つ栃木県青年海外協力隊 OB 会はボランティア団体だが、栃木県という地元への還元活動であるならば、協力は惜しまないつもりである。大学の行政改革ならば尚更である。

5. 今後の方向性

現在、農協の仕事も、外国人労働者が農家で働く、研修するなどの国際化が物凄い勢いで進展している。行政、大学、企業も今後更に進む国際化の波に負けないような人材の育成、確保が当たり前になってくると私は思う。その中で、国際学を学ぶ学生のニーズは必ず来ると信じているし、その時に真の力を発揮していただきたい。そのためには、外国語が喋れるだけでなく、+ の技術と、人間としてのやさしさが必要であると思う。

また、大学を生かすも殺すも学生一人一人であると思うので、是非、学生の皆さんから盛り上げていただきたい。

私もまだまだ若輩ものであるが、今後も地域のため、日本に住む外国人のため努力して

いきたいと思う。

最後に、青年海外協力隊はお金で買えない貴重な経験なので、是非隊員になりたい方は下記までメールください。

masaru48@trust.ocn.ne.jp 高橋昭博

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第4期修了生)

「就職の旬」

趙 春花

私は宇都宮大学大学院国際学研究科国際交流研究専攻の第一期卒業生の趙春花でございます。中国黒龍江省出身です。

宇都宮大学を離れてもうすぐ8ヶ月になります。宇都宮大学大学院国際学研究科の先生の皆様、留学生課の皆様、そして先輩・後輩の皆様いかがお過ごしでしょうか。ずっとご連絡せず大変申し訳ございませんでした。

宇都宮大学大学院を卒業し、私は静岡県浜松市にある、ある情報機器設計・製造関連会社に就職し、そこで主に中国・韓国の市場開発と外国人技術者の受入れ及び彼らの日本語教育、ビジネスマナーの教育(日本語・日本のビジネスマナーについて自分もまだ良く分かっていないのが現状ですが)などを担当しております。その関係で日本の人口推移及び就職率などについて調べたことがあります。また、仕事の関係でいろいろな人材紹介会社、派遣会社の担当者の方々とお会いする機会があり、日本の人材不足の現状についていくらか理解を深めることが出来ました。この場をお借りし、私が知っている限りの情報を皆様にご提供致したいと思います。就職活動を行っている後輩の皆様、特に日本での就職にいろいろな不安を抱えている留学生の皆様にも少しでもお役に立てれば幸いです。

まず、日本の人口推移についてですが、皆さんご存知の通り、日本はすでに少子高齢化(出生率2.08以下、65歳以上の人口の割合が7%以上)が始まり、総人口は2006年の1億2千7百万人をピークに減少し続け、2050年になると総人口は1億人弱になり、労働人口(15歳~64歳)は2006年より37%弱減少し5千万人ぐらいになるそうです。その時の65歳以上の人口の割合は39%以上になり、14歳までの子供の割合は9%未満になると予想されています。

労働人口が減る一方、近年日本ではフリーターや通学も修業も就職活動も家事もしないニートが急増しており、それにつれ求人倍率(求人数÷人材)は高くなりつつあります。2005年年末には13年ぶりに新卒の高校卒業生、大学卒業生の求人倍率が共に1倍を超えました。また、来年2007年にはいわゆる「2007年問題(第一次ベビーブームの時生まれた方達が一気に退職され、企業・団体は人員不足に陥る)」も抱えており、2006年現在の求人倍率は高校卒業生と大学卒業生の平均求人倍率が1.5倍を超えているそうです。つまり人材供給不足の状況がすでに始まっているとのこと。それに、日本の景気も今年で完全に回復し、人材の需要がもっと高くなりつつあるため、求人倍率はしばらく高くなる見込

みです。

人材は企業経営の源です。人材を確保するため、日本の多くの企業、特に大手企業はすでに海外からの人材の直接採用に踏み切っております。その際、大きな壁は言語と文化の違いです。それを補えるために日本の多くの大手企業では海外に教育センターを設置し、日本語と日本文化の教育を実施し、それから人材を受入れることを実施し始めております。それに比べると日本にいる留学生は日本語も出来、日本文化にもある程度馴染んできた人が多いため、日本国内の企業にとっては非常に大事な存在になっております。また、日本の政府では昨年から留学生の日本国内採用を促進するために就職ビザ（大学を卒業し、卒業した年に就職できなかった場合、就職活動を行うための在留資格、滞在期間半年から一年間）を交付し始めています。

現在の日本は、時代的にも制度的にも留学生の就職に非常に有利になっております。私は日本語がまだまだだから駄目だとか言いながら諦める前に、まずチャレンジして見ましょう。諦めたら試合はそこで終了しますが、諦めず全力を尽くしてやってみると何かが起こるかも知れません。「千里の道も一歩から」という諺があるように、まず一歩踏み出すことから始めて見ましょう。

今が日本での就職の旬ですから、チャンスをつかみ自分たちの夢に向かってもう一歩前進しましょう。

（国際学研究科 国際交流研究専攻 第1期修了生）

さて、知求会ニュースも、無事5年目を配信することができました。これまでの原稿執筆者の皆様、ありがとうございます。Season's Greetings! 皆様、よいお年をお迎え下さい。なお、来年は博士後期課程が開設され、国際学研究科の新たな時を迎えます。また、大学も宇都宮大学博物館のグランドデザインの実現化に向かい、大学院同窓会は他学部同窓会と同様に協力をしていきたいと思えます。

これから、年末年始にかけさまざまな情報交換がなされる時期です。ぜひ、先生方、同窓生におかれましては、教え子、同級生・先輩・後輩にこの「知求会ニュースを読んでいますか？」と声をかけて下さい。メールアドレス変更に伴い、配信率が減少しています。国際学部 HP にアクセスしていただければ、バックナンバーの知求会ニュースを見ることができます。（<http://www.afis.jp/>）そして、事務局へアドレスの変更連絡をお願いします。

編集後記：限られた時間でニュース発行、同窓生の皆さんのご感想はいかがでしたか？ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思えますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。同窓会会員の皆様へのお願い：
住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。global@minakuru.net
